「大東文化大学看護学ジャーナル」発刊にあたり

大東文化大学スポーツ・健康科学部看護学科　学科主任

杉森　裕樹

2018年度の看護学科の新設とともに，学会組織が学部単位から各学科単位の組織へと改編され，従来のスポーツ・健康科学会は「スポーツ科学会」「健康科学会」「看護学会」となりました.「看護学会」ではこの改組を好機としてとらえ，高い学術性を希求する学会誌（大東文化大学看護学ジャーナル）を発刊することといたしました．看護学科内の教育活動・研究活動の発展向上，会員相互の連絡，親睦を図ることを目的とするのはもちろんのこと，高い学術性を志向する雑誌として，看護学科の一つの社会への情報発信の場，プラットホームとならんことを期待しております.

発刊にあたり，本ジャーナルができる契機となりました看護学科の誕生までの歴史的な歩みについて少し振り返ってみたいと思います.

大東文化大学の前身である大東文化協会は，1923年（大正12年）帝国議会の決議によって創設されました.東洋の文化を基礎として西洋の文化を吸収し，東西文化を融合して新しい文化の創造を図ろうとする有識者の提案によりスタートいたしました．自国の文化やアジアの文化を知り，ゆるぎないアイデンティティに基づいて西洋文化の良さを吸収していこうとする，まさに現代の国際社会の規範ともなる考え方に基づいています.

この第1巻では，昨年7月24日に本学東松山キャンパス60周年記念講堂にて開催されました第1回看護学会の4人の講演者から寄稿いただきました．講演はバラエティに富み，タイトルをご覧になると一目瞭然ですが、まさに大東文化学園の建学の精神である「東西文化の融合のあり方を説いた理念」を体現する大会であったと思います．本ジャーナルの礎の一つにもなっている理念と考えています.

14年前の2005年（平成17年）に7学部目として，人文・社会科学系が多い本学のなかで自然科学系のスポーツ科学科と健康科学科の2学科で構成され

るスポーツ・健康科学部が開講いたしました．後者の健康科学科は健康科学・医療系の新設学科でしたので，当時，本学の中に卒然と誕生したように思われた方もいたようですが，実は大東文化学園の中では、脈々と続いてきた医療系資格の養成校としての歴史・伝統・キャリアがあります．

さらに遡りますが，1960 年（昭和 35 年）に大東医学技術専門学校（柔道整復師養成）が認可され，翌年の 1961 年（昭和 36 年）4 月に大東医学技術整復専門学校に改称，そして衛生検査科が新設されました．1967 年（昭和 42 年）に大東医学技術専門学校と再度改称し，1971 年（昭和 46 年）に大東医学技術専門学校の衛生検査科を臨床検査科と変更しました．したがって，健康科学科は,臨床検査科が半世紀ほど学園の中で培ってきた臨床検査技師養成校の歴史・伝統・キャリアを継承し，高い医療系の専門教育を充実・発展させて今日に至っています．すでに，病院や診療所などの医療現場に多くの OB・OG が活躍しております．

そのような本学の歴史を踏まえて「看護学科」の誕生です．歴史的な背景を鑑みますと，看護学科が設置されたのも必然と言えましょう．スポーツ・健康科学部が誕生して 10 余年、「平成」最後の 2018 年（平成 30 年 4 月）に設置され，いよいよ今年から新しい元号のもとで歴史を重ねていくことを期待しております．

最後に，「大東文化大学看護学ジャーナル」の未来に向けての方向性として，私見を述べさせていただくことをご容赦願います．本学科の熱意と気概の表れと考えても良いと思いますが，北田志郎編集委員長の理解のもと，ISSN も申請し予定番号（Print edition ISSN 2434-5822）を国立国会図書館から得ました．発刊当初は冊子体だけですが，いずれは広く学外にも発信できるようにオープンアクセスの方向性も模索していただきたいと個人的には思っています．

国際的には、オープンアクセス(OA)というコンセプトが世界の出版業界の様相を徐々に変えてきました．10 余年前からそれこそ卒然と現れ，従来のスタンスから脱し，アクセスしやすいものにする試みで，当初より従来の出版界はもとより学術会からは賛否両論でした．学術界では支持者が出てくる一方で，OA

と学術出版の持続可能性に関して懐疑的な立場を示す人もいます．地域ごとにその受け入れの程度や賛否の意見が異なることも最近の調査で分かってきました．(註1) OA大手と言えばPLoS，Hindawi，BioMed Cetnral 3社が有名ですが，それ以外の出版社もタケノコみたいにどんどん出てきています．質の担保がなされていない営利目的のものも多く見受けられ，そういう点がOA全般に対し懐疑的な印象(註2) をもたれる原因となっています．しかしながら、高いインパクトファクター（PlosOneではIF4－5）を有するものあり，大手出版社もこの領域に既に参入し（NatureグループはScientific Reports，SpringerはSpringer Plusという雑誌を創刊）まさに玉石混淆の世界です．しかしながら，このトレンドは学術界でも新しい試みとしてすでに定着してきた感があり，一過性のあだ花に終わるとは思えません．インターネットの勃興とともに必然的に出てきたOAの試みが悪いのではなくて，その手法を非倫理的に営利目的で運営している出版社が問題なのだと考えています．問題あるものはいずれ淘汰されるでしょうが，学術界の研究者や学生も自分の論文を掲載させるジャーナルに対して眼識をもつべきでしょう．

このジャーナルも「昭和」からの歴史を継承し，「平成」最後の年に第1巻が発刊されるのも何かのご縁と考えます．新しい年号の元で歴史をさらに重ねていくことでしょう．看護学科1期生の学会運営学生委員の増井拓馬君からも原稿を寄稿してもらっています．看護学科学生と教員が協働で実りある雑誌を創り上げていき，2023年の本学創立100周年に向けて，さらに看護学科とともに発展することを願っております．大東文化学園の関係者の皆様，また学園外の皆様にも支えられて，より高い学問への訴求を継承し，社会に情報発信・還元できるよう,不断の努力を大東文化大学看護学会の会員である学生･教員一同，初心を忘れず「猪（亥)」突猛進したいと思います．これからも皆様のご協力をお願いいたしまして，ご挨拶を兼ねて巻頭言といたしたいと思います．

2019年（亥年） 1月

註１）Geographic trends in attitudes to Open Access author – Findings from Editage Global author survey 2018-, www.editage.jp/insights/sites/default/files/Geographic%20Trends%20in%20Attitudes%20to%20Open%20%20Access.pdf

註 2）ジャーナルの中には営利的なものもあり，ハゲタカジャーナル（偽学術誌）などと評する人もいる．